

# 現場実践と研究を重ねて 実績を積み上げる

長岡介護福祉専門学校あゆみ  
大澤 澄男

## 1. ねらい

12年間にわたる大学での勤務を経て、現在、地元の3年制の介護福祉士養成施設で非常勤講師を務めている。かつて障がい児者施設長として、そして、社会福祉士、福祉施設士として、「生涯現役」との考え方のもと、特に私たちの世代には理論と実践を結び付け、「既製服から注文服の福祉」への具体化と定着化が求められている。

「福祉施設士行動原則」にある行動⑪と行動⑫は、まさに私たち福祉施設士の理念にも通じるテーマではないだろうか。

## 2. 現在までの取り組み状況

施設等サービス提供現場での施設長経験、社会福祉士としての活動、介護福祉士養成校(大学・専門学校)における指導経験、そして、今も現役を続け、現場実践のフィールドの中にいる。この間、現場実践の積み重ね→記録→法則性発見→帰納的理論化→実践の効果的実践へというサイクルを試み、積み重ねてきた。

## 3. 課題と今後の対応

大学等の研究機関に属する研究者は、文献

研究センターだけでなく、フィールドを実際にもって現場に入ることが求められる。実践現場にいる研究者には、研究方法の確立と積み重ねが求められる。よい実践を日々重ねても、帰納的方法で理論化できないこともある。そして、その理論を有効な福祉教育に結びつけることも求められている。

しかし、現実においては、国家試験合格率の向上に追われ、本当に地に足がついた教育は、なかなか進められていない。

## 4. 具体的な所見と内容

現状では、理論とサービス実践がうまく結びついていないように思われる。近年そのことが着目されはじめ、介護福祉士養成においては、「介護過程」が重視され、養成校と実習施設との協力により利用者の全人間性を捉え、「個人の尊厳」や「個別ニーズ」をおさえる支援計画が目指されている。一方、社会福祉士養成においては、「ケアマネジメントの導入」により、医療・看護モデルを超えた「人間モデル」に立脚した「個別支援計画とその実践」が目指されている。

福祉サービスを提供する各職種は、その専門資格化が進み、さらに、それぞれジェネリックからスペシフィック化が進もうとしているなかで、臨床チームリーダーであり、福祉サー

ビス提供の管理・運営者として、福祉領域横断型の「福祉施設士」が専門職として認知されていないのは何とかしなければならないことではないだろうか。

メンバーの専門性がどんどん向上しているのに、その指揮者である福祉施設士が、無資格でよいはずがないと考えるのが自然ではないだろうか。そのキャリアにおける確実な実績づくりとして、また、「日本福祉施設士会倫理綱領」の具体化として、「福祉施設士行動原則～6つの姿勢と12の行動～」が策定された。さらに、それに基づく活動実践を積みあげ、公開し、研鑽しあって資格の認知向上につなげるという環境や体制を作ろうとしていることの意味は大きいと考える。

同原則(6)自己への姿勢、行動⑪「学び続けることで自己の成長をはかる」、行動⑫「実践を重ねることで信頼を積み上げる」に関連して、私は研究者として、文献研究中心となりすぎず、現場実践のフィールドを持つこと、そして、生活者の視点を基本に据えること、さらに、福祉教育としてのより有効な教育方法を検討していくことが大切であると考えている。さらに、現在の社会福祉士国家試験の合格率を高めることに追われ、各大学等の特色ある社会福祉カリキュラムが失われつつあると感じており、社会福祉士国家試験内容や方法の再検討などが求められるのではないかと感じている。

そして、その両方のバランスをとりながら、

近接する専門領域からの提言を交えながら、新しい「福祉サービス提供の管理・運営者として習得すべき分野や内容」が再構築されることを期待している。まさに、福祉サービス分野も「連携」から「連帯」の時代でもある。

## 5. 管理者、運営者として 身に付けるべき内容

各福祉種別の福祉サービスおよび関連専門領域の基礎的な理念・哲学、関連する知識と対人援助技術の基本的理解、併せて経営マネジメント理論と方法、専門職種をコンダクターのようにまとめ、それぞれの持つものを十分に引き出せる知識・技術を持つことが必要である。この方向に向かって、現在の全社協中央福祉学院での「施設長専門講座」の実践科目と実施方法は再検討されなければならない。

また、現在の国家資格またはそれに準じた資格である、介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士、保育士、教員免許、医師、看護師、理学・作業・言語聴覚療法士などとの整合性も検討されて、各サービス領域でばらばらな管理・運営者資格は、「臨床チームリーダー」としての資格化として統一していくのがよいのではないかと考えている。

この雑駁な問題提起が、これからのあり方を議論していくきっかけづくりにでもなったらと考えている。